

平成 30 年度卒業式及び平成 31 年度入学式の学長式辞

石 本 勝 見

はじめに

卒業式式辞では、資格、免許の意味について、それは保育の現場に立つために必要な入口切符に過ぎない。本学の教育目標の「子どものために 子どもと共に 学びつづける保育者」になってほしいことを話した。

さらに、良き社会人としてのマナーや態度を忘れずに生きていってほしいことなどを願いを込めて伝えた。

また、入学式式辞では、建学の精神「業学一如」について説明するとともに、自らが目指す「よい保育者」になるために、しっかりと覚悟を決めて努力してほしいことを伝え激励した。

平成30年度卒業式 学長式辞

弥生の空いよいよ明るく 越の大地に春のにぎわいの声聞こえる今日の佳き日に、平成 30 年度新潟中央短期大学の卒業式を挙げるに当たり、加茂市長 小池清彦様、本学元学長 長塚康弘様はじめ多数の御来賓から御臨席いただき誠にありがとうございます。

さて、卒業生の皆さん、この 2 年間、日々の授業は勿論、ミュージカルや出前保育、幼稚園、保育園や児童福祉施設等での厳しい実習など休む間もないほどの課題を乗り越えよく頑張ってきました。皆さんの努力を称え心からおめでとうのメッセージを送ります。

本学は保育士養成を使命とする短期大学であり、よい保育者として必要な知識や技術を習得し、更にそれらをどう実践場面で生かしていくか、その応用力、表現力等を実習等の場面で経験してきました。それは、例えば実習場面では、最初は話しかけても無視されてしまい、戸惑い、悩んでいたが、実習後半にはその子から「先生」と話しかけられて飛び上るほどうれしかったことや、子ども同士のトラブルでは、まっ

たくどうしていいかわからず、途方に暮れてしまった自分など様々な経験をしたことでしょう。その経験の意味などを親身になって丁寧に指導して下さった現場の先生と話し合い、振り返り、考えながら更に深く、子どもや保育を理解することができたことと思います。もがき苦しみ、自己の弱さにも向き合うことが避けられなかった日々など、この2年間の楽しいことも苦しいことも、すべての経験が皆さんの、今ここに新しい自分を創ってくれたことと確信しています。大部分の皆さんはこれから幼稚園、保育園、認定こども園等で保育者として仕事を始められるわけですが、取得した免許・資格はそうした現場に立つための入口切符にすぎません。よい保育者として子どもたちに慕われ保護者に信頼される保育者になるには、更に保育の現場での経験の積み重ねが必要だと思います。皆さんの胸の内にある「よい保育者とは？」の理想の姿に向かって、本学の教育目標「子どものために 子どもと共に 学びつづける保育者」をどうか心に刻んで、人が人を育てる仕事、ロボットでは決してできない意味のある、この保育、教育、人を育て支援する仕事に誇りを持って5年、10年と続けていって下さい。

また本学では、保育の専門職としての知識や技術だけでなく、人として社会で生きていくためのスキルやマナー、態度についても学んできたことと思います。

私がかねてから、専門家の基盤に良き社会人としてのありようが求められていると考えてきました。社会、地域社会には多様な人々が生活しています。障害のある人もない人も、赤ちゃんもお年寄りも、力の強い人も弱い人も様々な個性を持った人々が助け助けられ、共に影響しあいながら、つながって生きています。よき社会人とは、思うに、こうした社会の現実を踏まえ、あなたは私にとって、社会にとって大事な人であり、私が well being に生きたい、と同時にあなたも well being に生きる権利がある、このことを尊重し応援しようとする心、意思を持っている人であろうと思います。この観点からすると、いま日本に起きている深刻な児童虐待の死亡事例は、親の、自分の思い通りならない子どもは切り捨てられ、力の強い人が弱い人、子どもに害を加えている。極めて自己中心的であり、こうした考え方や態度は、たとえ「しつけ」としたとしても到底受け入れられません。

皆さんは保育者を目指すにあたって、その根底的な考え方として「子どもの、相手の立場から見る、考える」ことの重要さを徹底的に学んだと思っています。人間は生きていくために「自己中心的」にならざるを得ない場合が時にあるかもしれない、しかし人を育てる、人の成長や進歩を願うのであれば、その子の眼から世界を見ようとする態度、その子の心の世界にはどんな風景があるのだろうかと思う心は必要にして不可欠である、と言っていい。

相手の世界を大事にすること、共に力を合わせて課題に向かうこと（協働）、共に

新しい文化や価値をつくっていくこと(共創)－競争ではなく一の精神、態度は地球規模のグローバルな社会においても、現在の日本の社会においても、皆さんが間もなく活躍するであろう幼稚園や保育園などの場においても、人や文化の多様性を受け止めながら、共に気持ちよく生きていくためには一貫して、共通して大事なことはないか、と思っています。

さて皆さん、名残りは尽きませんが、未来に向かって胸を張って、本学での様々な経験で更に成長した自分を信頼して、一步一步しっかりと前に進んでください。

最後になりましたが、ご家族、保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。皆様のお喜びを私ども教職員も共有させていただきたく存じます。様々な面で本学にお寄せいただいた御支援に対し、心から感謝申し上げます。

最後の最後になりましたが、卒業生の皆さんの新しい門出に、私は惜しめない拍手を送ります。

平成31年3月15日

新潟中央短期大学 学長 石本 勝見

平成 31 年度入学式 学長式辞

万物の生命躍動し、新しい令和の時代がいま始まるこの春、平成 31 年度新潟中央短期大学入学式を挙げるに当たり、加茂市長小池清彦様、田上町長佐野恒雄様、元本学学長長塚康弘様はじめ多数のご来賓の皆様から御臨席をいただき、誠にありがとうございます。

ただいま本学への入学を許可された皆さん、入学おめでとうございます。ここから歓迎します。

また、ご家族・保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。私ども教職員は、全力で学生を支援し教育に当たる決意ですが、保護者の皆様におかれましても、本学への温かい御理解と御支援をよろしくお願い申し上げます。

さて、本学の最も大切な理念は、母胎たる加茂朝学校の精神に求められると思います。大正九年九月、ここ加茂の大昌寺、西村大串師が近隣の勤労青年のために学びの場を創設されました。すなわち、学ぶ意欲と意志があるものは、たとえ経済的状況が困難であったとしても仕事をしながら、仕事に行く前の時間、仕事が終わってから眠

りにつくまでの時間に、寸暇を惜しんで教えを受ける、歯を食いしばって学ぶという教育実践であります。こうした、いわば仕事をする 것과学ぶことが一体となって教育が行われていたわけであります。こうした精神を引き継ぐ意味も込めまして、経済的に困難な状況にあるものに対して、2年間の授業料を全額免除する本学独自の特別奨学金制度を国に先駆けて創設しました。国内のいわゆる有名私学にも決して劣ることのない、この誇るべき理念と歴史をしっかりと今につなげ、社会から信頼され選ばれる大学として存続発展していけるよう、私どもは全力で努力を重ねていく覚悟であります。ご承知の通り、本学は保育者養成の短期大学であります。私ども中央短期大学が養成すべき保育者とはどのような保育者であるか、あるべきか、教育の質の向上とともに、その大きな方向性を教育目標としてまとめました。

すなわち、「子どものために 子どもと共に 学び続ける保育者」であります。この意味するところは、すなわち、子どもファースト、チャイルドセンタード、子ども中心であり、先ず、子どもを何よりも大切に、子どもの眼から世界を見て、考えていこうという事であります。そして、子どもが子供らしく、子どもであることが大切なことであり、そうした大事な子どもが様々な経験を積み重ね自分になっていく、自己実現していく過程を、子どもに関わりながら、子どもからも教えてもらいながら、保育者たる自分も共に保育者として成長していきたい、そうした先生でなければならぬのではないか、という事です。子どもは教えられる存在であると同時に保育者の成長にとって欠かせない存在である、ということです。この考え方の根底には、我が国のみならず世界の児童福祉にとって最も大事である「子どもの最善の利益」という理念が共通して流れているのであります。今、新入学生の皆さんの心の中には「よい保育者になって仕事をしたい」という思いが強く存在していることと思います。どうか、自らが目指す理想の保育者になるために、高く、揺るがない志をもち、覚悟を決めていただきたい。しっかりと覚悟を決めて、目標を定めて2年間努力すれば必ず「よい保育者」として子どもたちの前に立つことができると信じています。私ども教職員は一丸となって、全力で皆さんを支え、応援します。

また、学びを深めると同時に、この新潟中央短期大学のキャンパスで、人生で最も輝き、自らの人格形成に大きな影響を与えるこの青春の時を、仲間と共に、また本学の教職員と一緒に、有意義に過ごしてください。

以上、学長としての式辞とします。

平成31年4月3日

新潟中央短期大学 学長 石本勝見